槐（かい）

岡井省二創刊

令和2年3月号

令和二年三月一日発行　第二十巻第三号　通巻第二四五号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

グローバルスタンダード

高橋将夫

恵方へと弾むラグビーボールかな

凍滝を月光すべり落ちてゆく

かまくらの中でまあるくなる時空

淑気とは紫色の素粒子よ

演歌より唱歌が浮かぶ初湯かな

初御空制空権は凧にあり

敵陣に弟が居る雪合戦

初霞その先にある運不運

お元日なんだ坂こんな坂老いの坂

グローバルスタンダードで毛糸編む

煩悩の器を洗ふ初湯かな

以上「俳句界」一月号より転載

PDF= 俳誌の salon

PDF= 俳誌の salon

槐安集

加藤みき

まづは腑を通りたる水大旦
そちこちに衣摺れのあり初座敷
初日出金波銀波の須磨の沖
湯煙のふはりとあがる釜初め
女正月優男らと猫と犬

中島陽華

亀とゐてこの射干玉の秋の夜
神在の安全ピンが五六本
増阿弥の面傾いで秋寒し
冬将軍何する者ぞちやんこ鍋
巫女笑んで南天しかと紅葉す

竹内悦子

毬栗に種三つあり鬼子母神
呼気吸気蓮根に穴そらに雲
竜の玉五臓六腑に音のして
天上は真青なりけり枇杷の花
冬至南瓜届きし夜の湯にをりて

雨村敏子

全身をひかりの中へ蒲団干す
大年の白湯飲んでをる喉かな
蓮の骨蓮根の穴槐山房
柿紅葉柿紅葉して父の空
枯のいろ枯の呼吸の美しきかな

近藤喜子

とこしへに翼ひろげしままの鷹
どうしても気になる動かざる凍蝶
煮凝や目を閉じ海を近くにす
人界の遥かを見つめゐる梟
青き星の輝き霜の声となる

瀬川公馨

十一月の間口薄縁印度藍　悼
銀杏座のグランドオペラ果て果てし
竜華咲く寒の入り日の神神し
冬木立春く日イの早さかな
えんやらや厳冬の配縄漁夫

柳川晋

狐火を見る会からの招待状
師は走り士は討ち入りの年の暮
ロボットのメイドの纏ふ淑気かな
老人の苦もなく独楽を回しけり
神の旅ふといなくなる人ばかり

熊川暁子

年末といふ紐あれば結びをり
流れ星光りし時が消ゆる時
五郎助に鳴かれコタンの壷を買ふ
凩が騒げば数へ唄となり
明日といふ見えぬ醍醐味返り花

PDF= 俳誌の salon
PDF= 俳誌の salon

江島照美

埋火や境おぼろの生と死と
営みの火を見て山は眠りけり
真には水鏡あり漱石忌
日記買ふ迷ひなく生き疑はず
辿り着くところシンプル根深汁

寺田すず江

冬銀河見果てぬ夢を追うてをり
絵手紙に恋のひとつも春星忌
話さねば解りあへなき落霜紅
船宿の歌行灯に綿虫来
梟の鳴き声急ぐこともなく

岩月優美子

誰彼のこころ癒さむ聖樹の灯
わたくしに停年はなし冬うらら
難問のまだ解けぬまま年暮るる
眠りたる赤児泣き出す大嘘
寒林の気のひしひしと身に纏ふ

近藤紀子

にこにこと真白な障子見てをりぬ
手の平よりぬくみをもらふ暮れの会ひ
参道にひつそり冬の花わらび
数へ日に毛玉取りつつ叱言聞く
冬落暉黄泉路を照らしをりにけり

岩下芳子

寒卵三分二秒のゆで加減
蟷螂の最後に枯るる目玉かな
獅子柚子の凹凸荒き面構
電飾の樹々を見下ろす冬北斗
雨落に炭敷く正月事始

有松洋子

サンタへの手紙書きゐる子へココア
祈ること覚えしはいつ冬銀河
簡単に街は廃墟へ冬の霧
ゆりかもめ騒ぎ遊ぶを川しづか
年送る長湯にわが身労りて

竹中一花

風花や東に近江一の宮
水鳥の万を養ひ湖暮るる
身に受けし枯葉の散華風の衣
空也忌の中京に鉦しんしんと
末世なほ十坪の家に注連飾る

前田美恵子

裸木の纏ふは風の音ばかり
隣との距離が遠のく冬木立
樹海又見過してをり冬銀河
寒念仏一糸の乱れなかりけり
数へ日や遮断機下りて時流る

PDF= 俳誌の salon
PDF= 俳誌の salon

槐市集

中田禎子

青空に干す白菜の芯に紅
山茶花の白無垢をぬぎ今朝の白
軸足のアキレス腱や冬の虹
子の帰る道は山越え注連飾る
冬耕のエンジン音のラップかな

吉田順子

綿入れや妣のぬくもり身に纏ひ
実南天こころ真つ赤に透き通る
歩を返す花つけてゐし冬草に
オリオンの今立ち上がる霜夜かな
広き家の古き柱や年の暮

井上静子

菊人形天女の舞の息づかひ
山茶花や近道の行き止まりなる
旅行案考へてをる炬燵かな
無理交じる予定表書く去年今年
極楽のこのままつづけ冬満月

今井充子

落葉期の日課となりし竹箒
啄むを防ぎ網かけ実千両
古暦の受診日記す筆の跡
仰ぎ見し青青なる木冬紅葉
小春空の即位祝賀に群れし人

岩田洋子

初春や蔵の重箱とり出す
神の意や華厳の滝を凍らしむ
結界に積まれし筆や照紅葉
神鈴の音のでこぼこや師走なり
寒満月夫と夜参りしてをりぬ

植木戴子

霜除けや青天続いてをりにける
幻日の令和の凧のゆくへかな
酉の市三本締めの声聞こゆ
巾着の赤き紐なり鮫小紋
高層のけやき坂行く雪女

PDF= 俳誌の salon
PDF= 俳誌の salon

大塚たきよ

水仙花土手に一本日を儘に
鉢植えの青葱きざむ匂ひかな
参道に並べられたる藪柑子
間伐の枝の隙間の冬すみれ
蕪漬の鞍馬の味の夕餉かな

岡田桃子

枯れ茎でココア掻き混ぜ目は遠嶺
山守りの話止まらぬ冬隣
花嫁の道山茶花の二・三片
輪島朝市母へ土産の丸柚餅子
銀輪や枯野と空を線引きす

荻布貢

雨止みて冬の虹あり令和の世
四阿の廻る水車や冬日差す
着ぶくれて三脚カメラ構へをる
洗濯も夕食も無し神の留守
兼題の冬を集めて選者の句

久保夢女

くさめしてやましきことを指折りぬ
茶の花やほろり本音のこぼれ落つ
枯れ急ぐ山に見惚れて一日なり
もう五分もう五分とは寒き朝
観世音笑まふ御堂に時雨けり

阪倉孝子

ビル街にガリバーの影冬日燦
冬日向木椅子にゆられ善女なり
海鼠腸を刻む和ばさみ声ありぬ
身心へ枯れいそぐなと天の声
老楽の心澄みゆき年惜しむ

柴田靖子

海静か色もあかるむ小春かな
わたくしの無我となりたる大枯野
小雪や木その朱の色萎へてきし
ゆつくりと夢を編み込む毛糸かな
溜め水のかたまりゆきて冬深む

槐集

桐一葉時代の風に乗りきれず　大阪　藤田美耶子
座敷童と遊んでみたき小春かな
オーロラは女神の舞や極寒夜
澄みわたる水仙の香のひとところ
裂け目よりひそひそ話石榴の実
冬ざれや零れ落ちそな明日がある　平野　多聞
ラマダンを知らぬ仏の夜長かな
綿虫や永代供養は誰がする
除夜の鐘想ひ出濡らす響きあり
晩学の句の道三寒四温かな
猫の見る猫の番組聖夜かな　芦屋　田中　信行
熱燗や渡れぬ鳥に仲間ゐて
師走にも桜吹雪の円舞曲（ロンド）かな
凍蝿に動かぬ意思のありにけり
泣く男立ち去る女近松忌

高橋将夫選

菱形の冬といふ字に風滑る　大阪　出利葉　孝
しがらみをポケットに入れ帰り花
北風を引き摺り走る環状線
生駒山木枯らしつ子の滑り台
薄セピア微睡（まどろ）かけた枯野かな
茅渟海波おだやかに開戦日　枚方　阪倉　孝子
石蕗の花遥かな家を灯しけり
琥珀色の時雨の中に茶毘を待つ
身を紡ぐ言の葉あまた枯野行く
除夜の鐘秘色のひびきありにけり
葱汁や元気印をよびこまん　岡崎　柴田　靖子
高下駄の足音たかく冬将軍
寄鍋や良きも悪しきも煮こみたり
冬の川ぼんやり空をうつすのみ
風呂吹や母の歳月重なりし

PDF= 俳誌の salon
PDF= 俳誌の salon

銀河往来

桐一葉時代の風に乗りきれず　藤田美耶子

桐一葉が落ちて天下の秋を知れば、時代の風に乗れるはずなのに、どうもこの桐一葉は風を読み違えたらしい。

〈座敷童と遊んでみたき小春かな〉はのどかで、〈オーロラは女神の舞や極寒夜〉は美しく、〈澄みわたる水仙の香のひとところ〉は清らか。

〈裂け目よりひそひそ話柘榴の実〉はぎっしりつまった赤い粒のささやきが聞こえてきそう。

冬ざれや零れ落ちそな明日がある　平野　多聞

明日という日の不確実性が「零れ落ちそな」の表現からよく伝わってくる。

〈ラマダンを知らぬ仏の夜長かな〉は仏の多聞ならではの一句で、〈綿虫や永代供養は誰がする〉では切実な問題がストレートに提示されたおり、〈晩学の句の道三寒四温かな〉では季語がうまく使われている。

〈除夜の鐘想ひ出濡らす響きあり〉の句、除夜の鐘に想い出を濡らす響きを感じる作者に感服する。

泣く男立ち去る女近松忌　田中　信行

歌舞伎、浄瑠璃の世界が近松忌とほどよい距離で詠まれている。いや、作者が通ってきた世界なのかもしれない。

〈猫の見る猫の番組聖夜かな〉の句、猫が興味深々で猫の番組に見入っている様子がなんともユーモラス。こんな聖夜もあるのだ。

〈熱燗や渡れぬ鳥に仲間ゐて〉には作者らしい周囲の人に対する思い遣りと気配りが感じられる。

北風を引き摺り走る環状線　出利葉　孝

北風の中を走る環状線の列車が詩的に詠まれていて愉快。

〈生駒山木枯らしつ子の滑り台〉の句は生駒山を滑り台と見た点や「木枯らし子」の表現がいかにもこの作者らしい。

〈しがらみをポケットに入れ帰り花〉の「しがらみをポケットに入れ」や〈菱形の冬といふ字に風滑る〉の「菱形の冬の字」や〈薄セピア微睡みかけた枯野かな〉の「セピア、微睡み、枯野」にも納得させられる。

除夜の鐘秘色のひびきありにけり　阪倉　孝子

秘色の響き。除夜の鐘の音はそれほど奥深いのだ。

〈茅淳海波おだやかに開戦日〉の開戦日は真珠湾攻撃の日。日本海海戦時の「天気晴朗ナレドモ波高シ」が思い浮かぶが、掲句は「波おだやか」なのだ。

〈琥珀色の時雨の中に茶毘を待つ〉は心に沁みる。

寄鍋や良きも悪しきも煮こみたり　柴田　靖子

寄鍋だからいろんな食材を入れるわけだが、「良きも悪しきも煮こむ」という発想に脱帽。

〈冬の川ぼんやり空をうつすのみ〉は川に空が写っているだけだが、それだけに「ぼんやり」の措辞がよく効いている。

〈風呂吹や母の歳月重なりし〉も心を引くものがある。

〈高下駄の足音たかく冬将軍〉は高下駄と冬将軍の取り合わせが味噌。

PDF= 俳誌の salon